

令和 6 年 9 月 13 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H00004

研究課題名（和文）生きられた古代宗教の視点による古代ユダヤ変革期の東地中海世界の総合的宗教史構築

研究課題名（英文）Construction of a General History of Religion in the Eastern Mediterranean World at the Jewish reformatory period from the viewpoint of Lived Ancient Religion

研究代表者

市川 裕（ichikawa, hiroshi）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・名誉教授

研究者番号：20223084

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 31,300,000円

研究成果の概要（和文）：リュブケ氏の古代ローマに関する研究がLARの新規性を強調するのに対して、古代ユダヤでは既にLAR的視点からの研究は実施されてきたとの印象が研究分担者から複数寄せられた。小国の過酷な歴史的体験を経て、自集団のIDに関する自覚が一神教的性格と相俟って早くに芽生え、ギリシア・ローマによる文化接触、さらに戦火を交える中で強く自覚されたことによる。但し、この見解はリュブケ氏の著作の精読以前の印象論が強いため、『パンテオン』の日本語版作成は今後のユダヤ研究の指標として必要不可欠の文献であるという確信を得た。他方、ユダヤ教が儀礼中心の宗教から制度的宗教へと変化した歴史的発展をつけることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代末期の宗教史を東地中海地域を焦点として考察することの意義は、この地域が、一神教の二つの流れの発祥地であり、ユダヤ人の広がり、多様なキリスト教徒の誕生が顕著に見られ、イスラムの出現と急速な征服の対象となってからは、啓典の民・庇護民ズインミーとして、宗教別に社会が形成され制度化されるという宗教史の発展形態の独自性に求められる。その歴史的な展開を理解するためには、個別宗教の記述のみでは到底不十分であり、そのための方法論として、リュブケ氏の提起した「生きられた古代宗教」の理解は不可欠であることが確認され、彼の名著『パンテオン』の日本語版作成は今後のユダヤ研究の指標となることが強く期待される。

研究成果の概要（英文）：Members of this research team have shared opinions that we had already made researches from the perspective of LAR compared with the researches on the ancient Roman religion which have been exerted for the first time by Prof. Rupke. This is because of the special political and social circumstances of Jewish people with hard experiences of destruction, deportation, and incessant foreign occupations by Babylonians, Greeks and Romans and of its identity building with the help of monotheism. However, this seems to be only a superficial impression before the careful reading of the master piece of Prof. Rupke. So the publication of the Japanese edition of his book will be the starting point of our new research on Jewish studies in the late ancient period based upon the new perspective of LAR. In addition, we could explain the processes of the development of Jewish religion from the ritualistic religion to the institutional religion.

研究分野：宗教学

キーワード：宗教学 古代ローマ宗教史 古代ユダヤ教史 考古学 西洋古典学 歴史学 イスラム学 ユダヤ教

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、過去2回の科研基盤(A)の研究から着想を得て、新たな問題関心と方法論を導入することによって、問題解決の糸口をつかんで申請に及んだものである。

(1) 一神教の二つのタイプ

2013~16年度に取得した基盤研究(A)「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究」(課題番号25257008)において、一神教には異なる二つのタイプがあること、そして、ユダヤ教からイスラームにかけて啓示法の宗教が発展したことを宗教史的事実として認識する必要性が明らかになった。これを、「セム的一神教」と定義すれば、キリスト教は、イエス・キリストという人格を崇拝する特異な信念体系をもち、そうした性格はギリシア文化圏に発展しペルソナの宗教と接合したからではないか、という問いが生まれ、本研究のローマ帝国のキリスト教化の理解に資する。

(2) イスラエル国ガリラヤ地方での西暦1世紀のシナゴグの発見

日本隊の発掘成果であるシナゴグの特徴は、3世紀以降に同じガリラヤ地方の各地で発見された数十ものシナゴグと明らかに形状が異なっている。その変化と神殿崩壊との関係、ユダヤ教が儀礼宗教から制度宗教へと変化する過程の研究が要請される。

(3) 「生きられた古代宗教」の研究視点の研究動向

エアフルト大学のリュプケ氏の提起する「生きられた古代宗教LAR」という研究方法は日本ではほぼ皆無であり、本研究は一神教の視点も加えたプロジェクトとして本邦初の試みであり、リュプケ氏のグループとの交流を深める絶好の機会である。

2. 研究の目的

(1) 古代宗教における一神教の発展の歴史的再検討

これまでの研究の成果から、古代ローマ帝国初期の時代は、キリスト教とラビ・ユダヤ教というタイプの異なる二つの一神教が興隆し、東地中海世界に浸透して従来の多神教世界を大きく変貌させる宗教史が展開した時代と理解すべきであるという理解が浸透してきている。これを、LARの視点から一貫したローマ宗教史として理解するリュプケ氏の研究成果と接続して総合的な宗教史を描く。

(2) 新たな宗教史的問い

本来神殿儀礼を中心としたユダヤ教がどうして個人的選択によって成立する制度宗教的な要素を帯びるに至ったのかというユダヤ教の宗教史的展開、それとキリスト教の発展とがどのように交錯してローマ帝国に浸透するのかという問いは解明されていない。ローマ市民の拡大とそれに伴った多様な宗教的欲求に対して、新たな宗教組織がどう展開して、キリスト教の優越的な状況が生まれていくのか、という総合的な宗教史理解の必要性である。この一神教支配への急激な変革を理解するためには、各個別宗教の成立史の内在的理解だけでは不十分で、多様な勢力のせめぎあう混沌とした状況への視点が不可欠である。

3. 研究の方法

(1) 生きられた古代宗教の視点を導入する意義

新たな歴史的視点と方法論とを試みる動機は主として2つある。第1は研究におけるキリスト教的歴史観からの解放、第2は、個別宗教のみの宗教史研究からの解放である。

第1には、古代宗教における一神教の発展は、古代宗教史における画期的な事件として、一神教の出現と急速な発展、それによって、当時の巨大な帝国ローマが多神教世界から一神教世界へ変貌したと理解されてきた。他方、一神教の発展においては、キリスト教の立場から、閉鎖的独善的なユダヤ教から普遍的な宗教としてのキリスト教への発展の面が強調されたため、一神教の宗教的性格の理解がユダヤ教を配慮せずに行われてきたきらいがあった。

他方、古代ローマ宗教史研究の側から見ると、一神教の展開は、ユダヤ教とキ

リスト教が一つの運動として個人の自由な選択による共同体形成という個人主義的宗教の発展として捉えられている。そうだとすれば、西暦2~3世紀までの間の宗教史理解は、一神教の両宗教を共に考察してこそ、より公正な歴史記述が大成できるはずである。そのために、一般市民の側からの視点、下からの宗教理解を試みることが求められ、実際、それを実施したリュプケ氏の研究は参照するに値するものである。

第2に、従来、古代ローマ時代後期の宗教研究は、それぞれ個別の宗教を単位として半ば没交渉のまま併存する事態を乗り越えることができずにいた。古代ユダヤ教研究、古代キリスト教研究、古代ローマ宗教研究、あるいは、ローマの外来宗教研究等々の併存のことである。これらの研究が没交渉で済ませられた大きな理由は、各宗教研究がそれらの宗教の教義、儀礼制度、社会秩序を記述することを目的に行われてきたためである。こうした現状を打破し、古代東地中海世界の宗教事情を観察するために、研究の新しい目的と視点を導入することが求められる。

特定の宗派だけを扱う宗教史的記述の弊害を克服するために参照するのが、リュプケ氏の古代ローマ宗教史の視点である。宗教学分野の知見で、Lived Religionの観点を古代史に導入して、古代ローマ宗教史を都市の宗教として分析する手法が用いられている。これが、いわゆる、都市住民の生活世界から問いを起こして、冠婚葬祭のような、宗教的関心の発現形態に考察の焦点を結ぼうとしている。

(2) 発掘調査に代えて翻訳作業を実施し日独の合同研究会を開催

本年度に予定したイスラエル国テル・レヘシュ遺跡の発掘調査は、コロナ禍が2年以上続いたため繰り越しても実現は困難だった。そのため発掘調査はコロナ後の可能な時期に続行するとして、リュプケ氏の研究の重要性に鑑みて、その主著『パンテオン』の読書会を実施しただけではなく、翻訳出版の必要性を痛感し、これを本科研実施期間の成果とするために翻訳準備作業を企画し実施した。さらに、科研の研究の深まりを期して、リュプケ氏の研究グループとの研究集会を継続開催することを目指した。

その際には、日本側の個別研究は考古学と文献学に基づいて、LARの視点を取り入れた古代ユダヤ教研究であることを極力目指した。具体的な課題としては、発掘調査地のシナゴークと村落構造の関係の解明、ユダヤ教の生活慣習の研究 例えば、食習慣、穢れの忌避、魚醤、祭司階級と律法学者など、神殿時代と神殿崩壊後の時代の宗教史的变化とユダヤ社会内の多様性との関係などである。

4. 研究成果

(1) 多神教世界の個人の宗教意識理解のための分析概念の普及

リュプケ氏の主著を精査する中で、本書の新しさが古代宗教研究において改めて深く認識された。現時点ではそのうちの二点を挙げて今後の共同研究に生かすことを目指す。第1は、宗教史理解と方法論の吟味である。一神教の世界展開に伴って、世界宗教史は「儀礼としての宗教」から「複数の個人的宗教」へという理解は欧米の古代宗教学者に共通だが、リュプケ氏は前者においても儀礼を遵守する人しない人があり、基本は個人にとっての宗教から考察を始めるべきであるが従来十分には考察されていないとして、個人的宗教はユダヤ教とキリスト教の出現前には疎遠であるため、なにか別の複数の定義や説明 some further clarifications(p.10)が求められるとして、新たに宗教を定義し、そのための3つの要素(actors, communication, identity)を提示する。宗教は基本的に個人の生きる上での経験や活動と関わる営みのはずで、しかもそれは常に変化

にさらされているし、儀礼や教義として固定化する試みを頑なに拒絶する。記述することによってのみ、古代地中海域の宗教が輪郭を現わしてくる。それが本書の最も斬新と思われる研究につながったといえる。

(2) 宗教共同体を単位とする社会形成のプロセス

第2は、欧米の宗教史理解を相対化し、その理解の基礎をローマ帝国の特性に由来するものと捉えている点である。ここで想定されるローマ帝国の特性の解明が、リュプケ氏の主著の最大のテーマだったが、主著『パンテオン』を分析してわかった点の一つに、ローマにおけるキリスト教の展開は、キリスト教というローマ文化とは異質な外来宗教が流入した結果によるのではなく、ローマ社会自体が新たな宗教性を求め個人の自由な入信を許容する新宗教の試みを導入しさまざまに自己変化する中で、キリスト教が「創作され」てローマ社会で突出した影響力を発揮すると理解されているという点である。

リュプケ氏の研究では、ローマの地理的拡大、政治的変遷により、研究対象地域が拡大し、西暦前1世紀以後、ユダヤ地域とユダヤ人社会が包摂され、ローマから見たユダヤ教文化が記述された点が重要である。これによりローマ人から見たセム的一神教文化が極めて新鮮で、これを受けた視点の多様化を盛り込んだ研究の必要性が、今後のユダヤ研究に不可欠であることを痛感した。3世紀初期までは、ユダヤ教とキリスト教を区別するのは時代錯誤という見解、および「キリスト教の創作」という視点は、リュプケ氏の一神教に関する挑戦的かつ啓発的な指摘である。

ローマ帝国内部が記述の大半ではあるが、そこでのキリスト教の展開を帝国外に当てはめれば、4世紀から5世紀にかけて、宗教ごとに共同体が併存する状況が広がっていくことが推定される。イスラム教が登場したのは、こうした宗教による民族集団の併存する状況に只中であり、「経典の民」の概念によって、中世的な宗教共同体併存の社会を成立させたと理解することができる。欧米の一神教史を相対化するというリュプケ氏の構想は、東地中海から西アジアにかけての宗教史の展開を見れば、既に、相対化できることが明らかであり、その他に、インド以東のアジアにおける宗教文化の発展との比較研究が期待されることになる。

(3) リュプケ氏の主著の翻訳と他宗教文化研究への応用

本科研の共同研究者の多くは、古代イスラエルからユダヤ教社会にかけての古代史研究に携わってきており、そこでは主として宗教が関心の中心であることから、リュプケ氏が試みたLARに類似した方法的視点は、ローマ社会に比べ、既に試みられてきたという印象を語る研究者が複数いた。小国の過酷な歴史的体験が、一神教的性格と相俟って、自集団のIDに関する自覚が早くに芽生えたことによる。そうした関心から生まれた聖書やラビ文献の読解は、一神教における信仰や宗教体験の分析を主たる研究課題としたことから、確かに、宗教思想研究においては既に成果が出されてきたということもできそうに思えるが、しかし、こうした見解はリュプケ氏の著作を精読する以前の印象論が強く、今後の宗教研究に対する新たな指標として『パンテオン』の日本語版作成は急務であるとの確信を得た。また、文献を残さない社会階層の人々の宗教的態度を考えれば、考古学を駆使して個々人の宗教的取り組みに、従来どこまで配慮していたかは疑問が残る。それゆえ、本科研では、研究の方法で論じたような課題 シナゴークと墓地と村落構造、生活習慣と手工業製品、神殿儀礼と平信徒の宗教意識など、従来等閑視された分野の課題が本科研の対象として意識されたのは大きな成果であった。

リュプケ氏の視点では、ローマ宗教の側から宗教を観察しており、その際、ユダヤ・キリ

スト教は既に個人的な動機による入会を許容する制度宗教として前提されているため、ユダヤ社会における個人的宗教制度の成立の問題、即ち、ユダヤ教がいつ儀礼から個人タイプの宗教へと変遷したのか、という問題が考慮されていない。そのため、ユダヤ文化における儀礼の宗教から法の宗教への変遷の考察が本研究の重要な課題となった。

(4) リュプケ氏の研究グループとの日独リモート会合の実施

日独合同リモート会合の実施。

2022 年度中にリュプケ氏の同意を取り付け、2023 年 1 月より 1 年 3 か月間、夏の長期休暇を除いて、月一度、通常は両グループから 1 名の発表と質疑を行い、合計で 10 回の研究会合を持つことができた。LAR (生きられた古代宗教) に関する個別研究であり、日本側は本科研のメンバーが中心となり、先方はリュプケ氏の LAR 研究グループで欧州各国からの参加であった。指数の都合上、日本側の発表者とテーマのみ、以下に記す。

Jan2023, K. Makino : Understanding of the Jewish sense of clean and unclean through vessels: Lids in Palestine during the Hellenistic and Roman periods. E. Katsumata: Sense of "Contour" in the Mishnaic Judaism : according to the halachot on the uncleanness of objects.

Feb2023, M. Ezo: Gods and Goddesses inscribed on the coins of the Decapolis cities.

Jörg Rüpke: Religion and urbanization.

20 April2023, Kyoko Nakanishi: "Star Cults and Philosophers in Late Antiquity"

5 May2023, Iskra Gencheva-Mikami, *Mimesis* Reconsidered: Religious Ritual as Performance in Classical and Late Antiquity

15 Jun2023, YAMANO, Takahiko (by recorded video)

20 Oct2023, ICHIKAWA, Hiroshi: When did Judaism become an individual religion?

16 Nov2023, KASAI, Yasunori: A Comparative Aspect of the Intellectual World in the second century CE -Roman Law, the Second Sophistic and Jewish Law

Dec2023, Prof. S. UEMURA: Jewish Attitudes towards Judaism between the Wars (70 -132 CE)"

22Feb2024, Prof. Hisako Koike: "La Dance Macabre" in 15th century-Its origin and etymology in relation to the cult of Maccabees, specifically, Judas Maccabeus

15Mar2024, Prof. H. Kuwabara: Tel Rekhesh during the Late Iron Age and Roman Period

Prof. Jörg Rüpke: Concluding Remark

学術雑誌での本科研の成果の公表

日本聖書学研究所が、その欧文紀要 [AJBI](#) に、特集として公表する場を提供してくれることになり、2024 年 1 月末に 5 本の論文を申請し査読へと進んだ。内訳は日本側 3 本、欧州側 2 本である。来年度も、引き続き、特集への寄稿を促していく。査読の結果、採用が認められて編集に回った 2 つの論文については、業績に記載できた。

リュプケ氏の投稿論文 " "Lived Ancient Religion: A Change of Perspective" は、観点の新しさが方法論的な斬新さを要求することに自覚的で、新たな方法論と新たな成果の可能性を簡潔に述べている。発掘品の宗教的利用への想像力の指摘、また、研究方法として、既成の宗教概念から出発しないこと、これは特に、儀礼、犠牲、贖罪、救済、誓約などの宗教概念を最初から前提して分析することを控えることによって、「生きられた古代宗教 **LAR**」は「**religion in the making**」の視点で事象と向き合うことを教えてくれる。このように、**LAR** の要点が簡潔に説明されていて、極めて示唆に富むものを提示してくれたことは、今後の研究者の指針となるであろう。また、市川の投稿論文 "The Origin of Judaism as an Institutional Religion: Reading of the Shema in the Public Sacrifice" は、ユダヤ教が儀礼的宗教から個人の入会可能な制度宗教へ変化する歴史的変遷を仮説として提示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計26件（うち査読付論文 18件／うち国際共著 6件／うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Etsuko Katsumata	4. 巻 10
2. 論文標題 Christianity from the Perspective of Wissenschaft des Judentums: Jesus and Christianity According to Abraham Geiger	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The 10thCISMOR Annual Conference on Jewish Studies	6. 最初と最後の頁 100-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 牧野久実・後藤文の共著	4. 巻 29
2. 論文標題 遺物データベースの公開に向けた試行	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鎌倉女子大学学術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Makino. K & A. SHAPIRO	4. 巻 90-2.3
2. 論文標題 Petrography of Selected Pottery Vessels from Hellenistic 'En Gev: An Analysis of Previously Unexamined Pottery Sherds	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 三田史学	6. 最初と最後の頁 150-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 上村 静	4. 巻 16
2. 論文標題 恥知らずな男？（創12:10-20） ディアスポラの民としてのアブラハム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 旧約学研究	6. 最初と最後の頁 87-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川裕	4. 巻 60-1
2. 論文標題 21世紀の信仰と理性 ユダヤ人における宗教者の使命	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋学術研究（公益財団法人東洋哲学研究所）	6. 最初と最後の頁 209～235
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shuichi Hasegawa, Hidemasa Hashimoto, Hidetoshi Tsumoto and Takuzo Onozuka	4. 巻 Volume 2
2. 論文標題 The Excavations at Tel Rekhesh, Israel: The Results of 2013-2017 Seasons.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the 11th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, Volume 2, Wiesbaden: Harrassowitz	6. 最初と最後の頁 115-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Shuichi Hasegawa, Hisao Kuwabara and Yitzhak Paz	4. 巻 46/4
2. 論文標題 Who Built Tel Rekhesh?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Biblical Archaeology Review	6. 最初と最後の頁 34-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 小池寿子	4. 巻 第122巻（第3号）
2. 論文標題 盲者たちの舞踏（Danse aux Aveugles）における「牛に跨る死」をめぐって—中世後期における死の受容	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ユカクイン雑誌	6. 最初と最後の頁 1 - 24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川裕	4. 巻 第96巻別冊
2. 論文標題 「生きられた古代宗教」の研究視点の意義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 141-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 市川裕	4. 巻 第61巻第2号
2. 論文標題 「第2の枢軸時代」に向けて 人類の精神革命と自己変革	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『東洋学術研究』	6. 最初と最後の頁 76-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川裕	4. 巻 -
2. 論文標題 法的宗教としてのユダヤ教とその現代的変容	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『イスラームの内と外から 鎌田繁先生古稀記念論文集』ナカニシヤ出版	6. 最初と最後の頁 152-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上村静	4. 巻 96/2
2. 論文標題 イエスの接触 ツアラアト/レブラ、聖性と穢れ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 29-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 葛西康德	4. 巻 73号
2. 論文標題 コモン・ローにおける『法学提要』の意義 その歴史と現状	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 法制史研究	6. 最初と最後の頁 271-323
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Makino. K & A. SHAPIRO	4. 巻 90-2.3
2. 論文標題 ' Petrography of Selected Pottery Vessels from Hellenistic 'En Gev: An Analysis of Previously Unexamined Pottery Sherds '	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 三田史学	6. 最初と最後の頁 150-170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Makino. K	4. 巻 -
2. 論文標題 ' Persian and Hellenistic Period Pottery '	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 SUGIMOTO T(Ed.) Tel 'En Gev. Report of the Keio Archaeological Mission, 2009-2011, Mohr Siebeck	6. 最初と最後の頁 258-270
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小池寿子	4. 巻 第26巻第1号
2. 論文標題 西洋美術における死の表現と死者への追悼	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 臨床死生学	6. 最初と最後の頁 20 - 26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ICHIKAWA Hiroshi	4. 巻 32
2. 論文標題 Toward the 'Second Axial Age': The Spiritual Revolution of Humanity and Self-transformation	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 The Journal of Oriental Studies	6. 最初と最後の頁 147-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 H. Ichikawa	4. 巻 58
2. 論文標題 Jewish Coexistence: Past, Present and Future	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Special Issue: Coexistence in the World of Abrahamic Monotheism: With Special Attention to Islam, Orient	6. 最初と最後の頁 7-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 H. Ichikawa	4. 巻 49
2. 論文標題 The Origin of Judaism as an Institutional Religion: Reading of the Shema in the Public Sacrifice	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 AJBI (Annual of the Japanese Biblical Institute)	6. 最初と最後の頁 in printing
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Joerk Riepke	4. 巻 49
2. 論文標題 Lived Ancient Religion: A Change of Perspective	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 AJBI	6. 最初と最後の頁 in printing
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shuichi Hasegawa, Hisao Kuwabara and Yitzhak Paz	4. 巻 135
2. 論文標題 Tel Rekhesh 2019: Preliminary Report	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Hadashot Arkheologiyot	6. 最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Mordechai Aviam, Hisao Kuwabara, Shuichi Hasegawa and Yitzhak Paz	4. 巻 1
2. 論文標題 A First-Second Century CE Synagogue on a Jewish Esate on Top of Tel Rekhesh	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Levine, L. I., Weiss, Z. and Leibner, U. (eds.). Ancient Synagogues Revealed 1981-2022	6. 最初と最後の頁 125-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 上村 静	4. 巻 54
2. 論文標題 古代ユダヤ思想における終末論と創造論 死後の生をめぐる思弁を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 聖書学論集	6. 最初と最後の頁 143-170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 葛西康徳	4. 巻 36
2. 論文標題 税はなぜとれるのかー古代ギリシア・ローマの場合	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 租大ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牧野久実	4. 巻 31
2. 論文標題 ユダヤの食の規定、コシェル~変化と継承という視点から~	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 鎌倉女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 23-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川裕	4. 巻 -
2. 論文標題 概説:「古代帝国」の時代 思想が地域と地域をつなぐ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『つなぐ世界史1 古代・中世』岡美穂子責任編集, 清水書院	6. 最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 勝又悦子
2. 発表標題 内なる巨人としての『ゴーレム』-ミドラシュからカバラへ
3. 学会等名 同志社大学一神教学際研究センターオンライン公開シンポジウム「巨人の場(トポス)」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中西恭子
2. 発表標題 西洋古代末期の宗教表象研究における「生きられた宗教」と感情史
3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小堀馨子
2. 発表標題 古代ローマの個人庭園におけるニンフェウムの宗教性
3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江添誠
2. 発表標題 The Correlation Between Neighboring Cities in the East Coast Area of the Sea of Galilee- Hippos, 'En Gev and Gadara
3. 学会等名 ARAM Society for Syro-Mesopotamian Studies 51st International Conference: The Decapolis: History & Archaeology, Oxford Oriental Institute (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 嶋田英晴
2. 発表標題 地中海とインド洋の接合～中世イエメンのユダヤ社会のRashutの変遷から～
3. 学会等名 『西洋中世研究』第14号特集研究会、西洋中世学会 オンライン形式
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江添誠
2. 発表標題 コインに刻まれた古代ローマ属州都市のアイデンティティ
3. 学会等名 月いち！オリ博オンライン講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 市川裕
2. 発表標題 ユダイズムJudaismはいつ宗教 religionになったか
3. 学会等名 日本聖書学研究所
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 勝又悦子
2. 発表標題 ユダヤ教伝統における『巨人』伝承の周縁性
3. 学会等名 中世英語英文学会第36回全国大会、公開シンポジウム「ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人族表象の変遷」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 江添誠
2. 発表標題 ガリラヤ湖東岸地域のヘレニズム都市の形成に関する一考察 ～エン・ゲヴ遺跡とヒッポス遺跡を事例として～
3. 学会等名 西アジア考古学会第25回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 市川裕
2. 発表標題 「生きられた古代宗教」の研究視点の意
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中西恭子
2. 発表標題 「生きた宗教」とジェンダー 古代末期の事例を読む
3. 学会等名 日本キリスト教学会関東支部会シンポジウム「キリスト教とダイバーシティ（ジェンダーの観点から）」（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hiroshi Ichikawa
2. 発表標題 Meditation on the real and the ideal in religion through the symbolism of the garden
3. 学会等名 The Twelfth Annual CISMOR Conference on Jewish Studies（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 上村静	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ふねうま舎	5. 総ページ数 250
3. 書名 終末の起源 二つの系譜 創造論と終末論	

1. 著者名 市川裕	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 440
3. 書名 ユダヤ的叡智の系譜 タルムード文化論序説	

1. 著者名 長谷川修一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 256
3. 書名 旧約聖書 戦い の書物	

1. 著者名 テル・レヘシュ発掘調査団・桑原久男編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 天理大学考古学研究室（非売品）	5. 総ページ数 96
3. 書名 イエス時代のガリラヤ地方と一神教の起源を探る	

1. 著者名 葛西康德	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Bibliotheca Wisteriana	5. 総ページ数 271
3. 書名 『文化転移 混合・普及・界面 （新版）』	

1. 著者名 長谷川修一	4. 発行年 2023年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 157
3. 書名 『ユダヤ人はいつユダヤ人になったのか パビロニア捕囚』	

1. 著者名 イェルク・リュブケ（市川裕・松村一男翻訳監修）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 612
3. 書名 『パンテオン 新たな古代ローマ宗教史』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	桑原 久男 (Kuwabara Hisao) (00234633)	天理大学・文学部・教授 (34602)	
研究分担者	上村 静 (Uemura Shizuka) (00447319)	尚綱学院大学・総合人間科学系・教授 (31311)	
研究分担者	小堀 馨子 (Kobori Keiko) (00755811)	帝京科学大学・総合教育センター・准教授 (33501)	
研究分担者	土居 由美 (Doi Yumi) (50751038)	神奈川大学・国際日本学部・非常勤講師 (32702)	
研究分担者	勝又 悦子 (Katsumata Etsuko) (60399045)	同志社大学・神学部・教授 (34310)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長谷川 修一 (Hasegawa Shuichi) (70624609)	立教大学・文学部・教授 (32686)	
研究分担者	葛西 康德 (Kasai Yasunori) (80114437)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・名誉教授 (12601)	
研究分担者	小池 寿子 (Koike Hisako) (80306901)	國學院大學・文学部・教授 (32614)	
研究分担者	江添 誠 (Ezoe Makoto) (80610287)	神奈川大学・国際日本学部・非常勤講師 (32702)	
研究分担者	牧野 久実 (Makino Kumi) (90212208)	鎌倉女子大学・教育学部・教授 (32705)	
研究分担者	高久 恭子(中西恭子) (Takaku Kyoko) (90626590)	津田塾大学・国際関係研究所・研究員 (32642)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	嶋田 英晴 (Shimada Hideharu)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	米倉 立子 (Yonekura Ryuko)		
研究協力者	山野 貴彦 (Yamano Takahiko)		
研究協力者	塩野谷 恭輔 (Shionoya Kyosuke)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Tokyo-Erfurt online seminar on LAR	開催年 2023年～2024年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ドイツ	エアフルト大学		